
【pkmnBW】 勇者と王様のその後のお話 【N主♀】

×るかと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【p k m n B W】勇者と王様のその後のお話【N主○+】

【Nコード】

N 7 4 6 0 P

【作者名】

×るかと

【あらすじ】

どうして私は、あの時彼と出会ってしまったんだろう。

「それじゃあ・・・」

そんな気はしてた。初めて会ったときから、絶対にいつかは別れなくちゃいけないってことは、何となく感じてた。でもこんなに早いなんて。あっけなくて、切なくて、目に入ってくる世界がどんとんとぼやけていく。やめて、行かないで、もっと君とお話したいよ。バトルしたいよ。本当の名前も知りたいし、小さかったころのことも聞きたいよ。

もっともっと、君のこと教えてよ——・・・！

「N！待って！」

思い切り手を伸ばした。でも、君には届かない。

「・・・サヨナラ」

視界がぼやぼやで何も見えなくなったからまばたきをする。目を閉じて、もう一度開いた時には目の前にはただひたすらに、嫌なくらい蒼い、蒼い空が広がっていて。行き場を失った手が静かに私の腰の隣へ戻ってくる。心の中に残ったのは、”虚無感”。

・ ・ ・

あの日から時間が大分経った。もしかしたら、全然経っていないのかもしれない。窓の外からベルとママの声が聞こえる。なんだろう、小さくてよく聞き取れないけれど、チェレンのことを話しているらしい。

“最初の一步はみんなで行こうよ。”

私たちはあの時からどれだけ強くなれたのかな。大きくなれたのかな。N、・・・N。会いたい。どこに行けば君に会えるの？どうして行ってしまったの？私は君に会いたいよ。

『——夢を叶えろ！』

最後に会話した言葉が頭の中をぐるぐると回る。君は、夢を叶えろと言った。もし、私が今の夢を叶えるとしたら、今すぐ・・・君に会いに行くよ。ベットから飛び降りてぼさぼさになった髪を結び直す。脱ぎ捨ててあったベストを着て、帽子をしっかり被って、大切な仲間をかばんに詰めて、空を飛ぶで窓から嫌なくらい蒼い空へと飛び出した。行き先は、ただ一つ。一番大切な思い出の場所へ。

・ ・ ・

ライモンシティの遊園地は、相変わらず活気にあふれていた。にぎわう人々、大道芸を見せるピエロ。そして、それをキラキラとした瞳で見つめる子供。カミツレさんがいると思われるジムを通り越して、イッシュ地方がほとんど見渡せるという観覧車の手前で立ち止まり、一番てっぺんを見上げてみる。

「トウコ」

チェレンがすぐ後ろにいた。少し驚いたけれど、彼は上を指さして「空、飛んでるの見たから」と言っているみたいに近い感じがした。

「はい、これ」

手を掴まれたかと思うと、何かを手の上に置かれる。自分のもとへ腕を引いてみると、そこにはポケモン図鑑の電源が切れて乗っていた。私が不思議そうな顔をしていたのか、

「全国版のポケモン図鑑だよ。アララギ博士のお父さんがバージョンアップしてくれたんだ」

そう言って説明してくれた。私はそれを聞きながら図鑑をいじってみる。初めの方は見事に「????」ばかりだ。

「今、時間あるかな？」

チェレンがそんなこと言うなんて珍しいな、と思った。でも私は時間が有り余っているのうん、と答えてそのまま2人で観覧車に乗り込む。ゴウン、ゴウン、ガタン、ガタン。観覧車がゆっくりと登っていく。チェレンは何も言いださないから、沈黙が続く。気まずい。声をかけようか迷ったけれど、話題が見つからない。部屋にずっとこもっていたから、私には話題がないのだ。うーんと頭の中で唸っていると、

「・・・もしかして」

ふと、小さな空間に声が響いた。もちろん私ではなく、チェレンの声。

「まだNのこと考えていたりしないよね？」

心臓が跳ね上がると思った。図星で、ここに来るまでずっと考えてたよ、なんて言えるはずない。だから、どうしてここに私がいるのか、どうしてここに来たのか、話そうと思う。

「・・・チェレンはさ、この観覧車乗るの初めてだったけ？」

「ああ・・・うん。初めてだね」

私が話を切り出すと、今度はチェレンが不思議そうな顔をした。彼はきっと驚くだろうな。それとも怒るんだろうか？チェレンに話すってことは、あとでベルとトウヤも話さないとな。

「私はね、2回目」

「・・・？」

「一回目はね、Nと乗ったの。・・・こんなこと言ってた」

『僕はプラズマ団の王様なんだ』

『僕はチャンピオンを越える』

「その時はね、私もそうなんだー、としか思わなかったんだけど、今思うとね？止めてほしかったんじゃないか、って思うの」

チェレンは何も言わずに、私の目を見て話を聞いてくれていた。

「私がその時止めてたら、Nと別れることなんてなかったんじゃないか、って。こんなつらい思いしなくてもよかったんじゃないか、って」

何も言わない優しさが、心にしみて、罪悪感とあの時の虚無感が一気に押し寄せてきて、私の涙腺はゆるゆるになってしまった。頬を冷たい液体が流れていく。チェレンはようやく口を開いてホワイト、と私の名前を呟く。

「私 自分のやったことが間違ってたんじゃないかって。ずっとそんなことばかり 考えちゃ、って「トウコ」

呼吸もままならないままぐずぐずと言っていると、チェレンが私をやさしく抱き締めた。あったかい。昔もこんなことがあったなあ。チェレンは優しいね。ずっと。

「私・・・やっぱり間違ってたのかなあ」

涙は止まらない。

「・・・君が気にすることはないんだよ。君はイッシュを救ったんだ。Nは、きっと分かってたんだよ。大丈夫、大丈夫だから」

彼は私の背中をやさしく撫でると、離してから、ね？と優しい笑みでこっちを向いた。ねえ、N。貴方はこんなやさしさを感じたことがある？

「うん」

「————あ」

ふと、チェレンが声を上げた。視線は窓の外、少し上あたり。どうしたの？と聞くと、いや、なんでもない。と答えられる。観覧車は一周して地上に戻ってきた。お姉さんの声と同時に二人で観覧車から降りる。私はこの時、ゼクロムが入ったモンスターボールが揺れていたことなんて、気付きもしなかったんだ。

「それじゃあ、早く帰るんだよ。ちゃんとおばさんにも話してね、

ベルにも、トウヤにも」

チェレンはくす、と笑った。

「うん。ありがとう」

「・・・僕は幼馴染としてできることをやっただけだよ」

そう言って飛び立っていくチェレンの頬は少し赤くなっていた。チェレンに話したらなんだかすっきりしたな、勝手に出てきちゃってママも心配しているだろうから帰ろうかなあ。と、ケンホロウを出そうとモンスタースターボールに手を伸ばした。

「トウコ」

・・・誰の声？チェレンは帰っちゃったし、トウヤはもう少し声が高い。ジムリーダーや四天王の人たちは来てるはずがない。この声って、もしかして。

「久しぶり」

振り向くと予想通りの人物が立っていた。そんなはずないよ、夢？私は夢を見るのかな、頬をつねってみる。痛い。

「え・・・ぬ・・・？」

「うん」

高くて細身の体。クセのかかった緑色の髪。首から下げている天体のネックレス。瞳を隠すように深くかぶった帽子。それは彼でしかなくて。

「N・・・会いたかったよ・・・！」

私は彼に向かって抱きついた。締まったはずの涙腺がまた緩む。

「うん・・・僕も」

もうぜったい離すまいと、ぎゅうっと腕に力を入れる。でも涙が流れているせいか、うまく力が入らない。Nは静かに、ぐずる私を見ていた。あの時会ったときは違って、人間味がある気がした。

「ねえ、どうしてあの時、行っちゃったの？」

私は一番聞きたかった質問をNに投げかけた。Nの顔を見るために見上げると、Nは悲しそうな顔をしていた。

「まだ・・・子供だったんだ、僕は。世界を何も知らなかった。だか

ら「ううん もういい」

悲しそうな彼の顔はもう見たくなかった。つらそうな顔は、もう見たくなかった。

「・・・お願い」

「え？」

「もう、どこにも行かないで」

あの時言えなかった言葉を、私は呟く。Nはそれが聞こえたようで、また、悲しそうな顔をした。私は、もう、見たくないのに。そんな顔しないで。笑って？ たったこれだけの言葉が言えない自分が悔しい。

「・・・そういうわけにはいかないんだ」

「どうして」

「警察が・・・国際警察が、ゲーチスのことを捜してる。七賢人はイッシュに残っているけど、きつとすぐに捕まる。僕に白羽の矢が刺さるのも時間の問題なんだ。だから少しでも行方をくらませないと・・・僕も・・・イッシュには残りたいけど」

「・・・そんな」

事が。せつかく、せつかく会えたのに。今度は離したくないと思っていたのに。ずっと一緒にいようって、いろんな話を聞こうって、思っていたのに。こんな・・・こんな仕打ち・・・

「そうだ。 トウコに会いに来たのには理由があるんだ」

す、とNは私の肩に手を置いて少し距離をとった。何だろうと思っていると今度は手をとって、

「僕と、」

「トモダチだよ？」

「ううん」

彼の頬が赤いのは初めて見た。それから少し恥ずかしそうに笑って言った。

「僕と、」

『恋人になってください』。今度は私の顔が赤くなるのが分かった。

不意打ちっというのはいくつものを言うんだらう。頭が回らない。私は今、Nに、何を、言われたんだっけ。

「・・・駄目かな？」

少し顔を傾けて私を見る彼はとても可愛くて。

「よ、よろ、よろ、しく願います」

答えは一つしかないのに、はつきりと言えなくて、まっすぐ見ていられなかった。

「本当に？」

きゅ、と静かに握った手を、私は優しく握り返しながら、

「・・・うん」

答えたのだった。

・ ・ ・

遊園地でNと再開してから数日。彼は私の家で生活していた。ママにも、ベルにも、チェレンにも、トウヤや、アララギ博士にまで話して、事情を聞いてもらった。みんなはそれを驚くくらいに承諾してくれた。

「それじゃあ、僕は行くよ」

私の家の前で、彼はレシラムをモンスターボールから放ってまっすぐこちらを見る。

「・・・行つてらっしゃい」

私がそういうと、彼は不思議そうな顔をした。空をマメパトの群れが通って行く。

「帰ってくるんでしょ」

「あ・・・うん、そうだったね」

最後に、お互いぎゅ、っと抱きしめ合った。私は涙ぐんでいた。また、いつ会えるのか分からないのだから、泣いてもいいでしょう？

「いつでも帰っていらっしゃい」

ママが家から出てきてNに話しかけた。Nは私と、ママと目を合わせてから静かにほほ笑んだ。

「行ってきます」

ぶわあ、とレシラムの翼が開き、Nは空の彼方へと飛んで行ってしまふ。私の目に浮かんだ涙は消えていた。あの時、消し去ってしまったいくらい蒼かった空が、こんなにきれいだなって。ああ、あの時家を飛び出してよかった。旅に出てよかった。Nと出会えてよかった。いつまた会えるのかは定かではないけれど、本当に、本当に、Nに会えてよかった。私はそれだけで、嬉しい。

(後書き)

ポケットモンスターは任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの登録商標です。

当小説は×るかところが個人で作成しています。関係者各社様とは一切関係ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7460p/>

【pkmnBW】勇者と王様のその後のお話【N主♀】

2010年12月30日21時39分発行